

世界遺産に見る日本経済の底力 ——モノづくりの原点

2015年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」をご存じだろうか。これは、幕末から明治にかけて日本が急速に近代化を遂げていった足跡を示す産業遺産群で、南は鹿児島県から北は岩手県の8県にまたがる23の遺産で構成されている。

その主なものは、葦山反射炉(静岡県伊豆の国市)、松下村塾(山口県萩市)、旧グラバー住宅(長崎市)、軍艦島(長崎市)などが有名だが、一見するとバラバラに見える各遺産も、全体を通して見ると日本が西洋技術を導入して産業革命を達成していった過程がよく分かる構成になっている。

例えば、葦山反射炉。反射炉とは銑鉄を溶融して大砲を製造する設備で、ペリー来航を機に幕府の命で伊豆の代官・江川太郎左衛門英龍が建設したものだ。その江川と交流を深めていたのが佐賀藩主・鍋島直正で、実際に反射炉を作ったのは佐賀のほうであった。1852年、ペリー来航より前である。佐賀に続いて薩摩、長州なども反射炉を建設した。

江川も各藩も蘭書の翻訳本だけを頼りに反射炉を作り上げたのだ。しかも反射炉の耐火煉瓦には焼き物の技術を活用するなど、西洋の最先端技術と日本の在来技術を融合させている。まさに日本のモノづくりの本領発揮である。

このうち佐賀の反射炉は現存していないが、葦山および薩摩と長州の反射炉は現存しており世界遺産に登録されている。当時の薩摩藩主は島津斉彬。斉彬は反射炉だけでなく、蒸気船建造や紡績、電気通信、ガス灯、ガラス、写真など幅広い技術の研究開発と実用化を大々的に進めた。このプロジェクトは集成館事業と呼ばれ、集成館には最盛期で1200人も人が働いていたという。明治維新より前の1850年代のことだが、それらは明治の近代化の基礎を作った。

薩摩など反射炉の技術は、反射炉建設に携わったサムライたちの手によって日本初の洋式高炉建設へ

と受け継がれていく。現在、岩手県釜石市に残る橋野高炉跡がそれで、これが後の官営釜石製鉄所、さらに官営八幡製鉄所へとつながっていった。

しかしこれらはいずれも失敗や試行錯誤の連続だった。それでも彼ら

は諦めることなく挑戦し続け、完成させた。官営八幡製鉄所で操業開始直後に2度も操業休止に追い込まれたことは本連載の第1回で紹介した通りだ。関係者は「これで万事休す」と覚悟したというが、それでも設備や作業方法を改善してようやく安定操業にこぎつけた。「明治日本の産業革命遺産」にはこうした先人たちの歴史も刻まれている。

さらに驚くべきことに同遺産には、完成から100年以上たった現在でも稼働中の設備が含まれている。官営八幡製鉄所(現・新日鉄住金八幡製鉄所)の修繕工場と遠賀川水源地ポンプ室、三菱長崎造船所(現・三菱重工業長崎造船所)の第三船渠やジャイアントカンチレバークレーン、三池港^{せんきよ}など。オペレーションやメンテナンスも含めた、日本の製造業の技術水準の高さを物語る。

このように同遺産は日本のモノづくりの原点を改めて我々に教えてくれていると同時に、元気を与えてくれる。先人たちが残した遺産を未来に生かすことは我々の責務でもあろう。それが日本経済を再び元気にする道でもある。(詳しくは、拙著『明治日本の産業革命遺産——ラストサムライたちの挑戦！技術立国ニッポンはここから始まった』(集英社より新発売)を参照)



岡田 晃
(おかだ・あきら)

大阪経済大学大学院客員教授・経済評論家。
日本経済新聞社編集委員、
「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、テレビ東京経済部長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長などを歴任。